

滋賀の文化情報誌

デュエット

Duet

2022 春 vol.141

特集

蘆花浅水荘と 山元春挙画塾

新撰 淡海木間権 86

四季大津写生図巻のうち
栗津別保付近・膳所眺望・雪に積む膳所

INFORMATION STATION 催し案内 2022 春

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内



山元春挙の別荘「蘆花浅水荘」。敷地内の庭園や石組みなどをふくめ、重要文化財に指定されている



山元春挙（1871～1933）
山元寛昭氏蔵

特集

蘆花浅水荘と 山元春挙画塾

明治の京都画壇で活躍した山元春挙^{やまもととしゆんきよ}の生誕150年にあたる今年、大津市歴史博物館と滋賀県立美術館でその業績をふりかえる展覧会が開催されます。

幼少期を過ごした膳所の琵琶湖畔に春挙が建てた別荘兼アトリエ「蘆花浅水荘^{あしかせんすいすう}」にうかがい、その人となりと多方面にわたる活動についてお聞きました。

膳所焼美術館

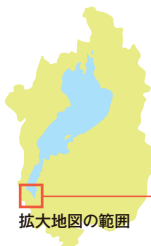
住 所	大津市中庄1-22-28
連絡先	TEL & FAX 077 (523) 1118
入 館 料	大人900円、高・大生500円、 中学生以下無料
開館時間	10:00 ～ 16:00
休 館 日	月曜日・火曜日（祝日は除く）、 年末年始（12/28～1/7）
アクセス	京阪電鉄石山坂本線「瓦ヶ浜駅」下車すぐ



膳所焼美術館。江戸時代、膳所藩の御用窯として創始された膳所焼の復興にも春挙は関わった

蘆花浅水荘（記念寺）

住 所	大津市中庄1-19-23
連絡先	TEL 077 (522) 2183
拝 観 料	500円 ※拝観は要予約 （3日前までに）
営業時間	10:00 ～ 16:00
アクセス	京阪電鉄石山坂本線 「瓦ヶ浜」下車 徒歩5分



拡大地図の範囲

取材／編集部
写真／辻村耕司



昭和8年(1933)4月に膳所町と石山町が大津市に合併する以前の市町村名とその境界

発展しようとする地域の文化芸術活動に積極的に関わっていた春挙

しやれっ氣とちやめっ氣が合わさったような人

——山元春挙に関して、明治から昭和初期にかけての膳所の町との関わりとあわせてお話しただけだと思います。まず、春挙のご両親はどういう方だったのですか。

山元 最初にお断りしておくと、私が生まれたのは祖父の春挙が亡くなってからです

ので、春挙に直接会ったことはありません。春挙の父・善三郎は、五個庄ごかしやうの高田善右衛門という有名な近江商人の息子でした。次男だったので、膳所の山元家へ婿養子に入る形で、春挙の母・直子と結婚しています。善三郎は、ちよっと変わった人だったようにです。商人の血は引いていたので、明治の初めに米相場場で大儲けしたかと思えば大損もしたり、若いころから禅に凝って、托鉢行たくはつぎように歩いてみたり。春挙が成功してから亡くなりましたので、お葬式はともに出せたそうです。

やまもと・ひろあき／1943年、大津市生まれ。山元春挙の孫。蘆花浅水荘で生まれ育つ。

——禅への関心は、春挙も受け継いだわけですね。

蘆花浅水荘
3代目当主

山元寛昭さん



膳所焼美術館
館長

松浦俊和さん

まつうら・としかず／1950年、兵庫県生まれ。大阪府在住。大津市歴史博物館館長を経て2020年より現職。



大津市歴史博物館
副館長

木津 勝さん

きづ・まさる／1970年、大津市生まれ。大津市歴史博物館学芸員を経て2020年4月より現職。

山元 春挙は、「徹居士ていこし」や「円融齋」といった号も用いていました。ただ蘆花浅水荘の所有が宗教法人記念寺となったのは、父の代に税金対策としておこなったものです。負担が大きくなりましたので、話がそれましたが、春挙は明治4年（1871）に、当時の滋賀郡中ノ庄村（大津市中庄なかつしやう）で生まれました。一男四女で家を継ぐ立場にあったのですが、幼小のころは少し体が弱く、一度、知り合いの近江商人である五個庄の小杉家に養子に出されています。小杉家でも、絵ばかり描いていたのでしょう。12歳の時に小杉家

※1 野村文挙（1854～1919）明治時代の日本画家。京都生まれ、京都府画学校や学習院で教え、のち日本画会にっぽんがの結成に参加。明治の日本画家。山口県生まれ。京都画壇の重鎮で、第一回室枝芸員に任ぜられる。

の遠い親戚にあたる日本画家、野村文挙のんきよの京都のお宅に預けられました。2年後、野村文挙が東京の学習院の先生になるため上京したため、その師にあたる森寛齋もりかんさいに預けられて、寛齋からみつつり仕込まれます。昔のことですから、こうやって描くんだよと教わることはありません。森寛齋先生は奥さんがおられなかったもので、もっぱらその身の回りの世話をするのが仕事だったようです。

寛齋先生は京都画壇の重鎮でしたから、いろいろなところへ招かれるわけですね。千家（茶道流派の家）やいろいろなお寺などへ。かばん持ちとしてついていった春挙は、きっとそこで立派なお屋敷やさまざまな名品を目にして、頭に入っていたのでしょうね。10代のころから才能を現し、認められていきます。

——年譜によると、15歳で京都青年絵画研究会展に出品して一等褒状を受けたのが最初で、以降ほぼ毎年京都博覧会などに出品して入賞していますね。

山元 京都画壇は日本画の一方の中心でしたので、京都で名を上げれば日本中に知れ渡ったのでしょう。

——21歳でドイツ・ババリア美術展覧会、22歳でシカゴ万国博覧会に出品……。

木津 20代前半で日本画を代表する作家の一人として認められ、明治31年（1898）に27歳で日本絵画協会評議員に、翌年には28歳で京都市美術工芸学校の先生になって、絵の指導もするようになります。

当時、京都で活躍していた竹内栖鳳^{たけうち せいほう}は、春挙よりも少し年上で先に美術工芸学校の先生になっていたのですが、二人ともそれぞれが画塾と呼ばれたグループをつくっています。春挙は先生になった翌年の明治33年に「同攻会」という画塾をつくっています（明治42年に「早苗会」と改称）。

昭和60年（1985）に滋賀県立近代美術館で催された特別展図録の巻頭に、春挙の人となりを紹介して、「親分肌で人の面倒見がよく」と書いてあります。

山元 そのようだったと聞いています。

「それでいて小柄でハンサム、都会的な小粋^{こいき}を持ち……」と書いてあります。

山元 はい。祇園^{ぎおん}ではよくもてたそうですから（笑）。

——じつは、それが意外でした。私は春挙の風景画などを見て、勝手に「とてもまじめな人」をイメージしていたもので。

山元 最初はそう思っていたとおっしゃる方が多いんです（笑）。ここには県立美術館で作品解説や団体の案内などをなさるボランティア・サポーターの方が事前学習として来られるんですね。狂歌などの作品を紹介しながら蘆花浅水荘をご案内し終わると、「なんか、おもしろいおっさんだったな」という印象をお持ちになって帰られます。ちようどその床の間に掛けてある作品

30年以上活動を続けた画塾「早苗会」

——大津歴史博物館の企画展（10ページ参照）で展示される早苗会の作品にも、しゃれっ気を感じさせるものがあります。

木津 そうですね。早苗会の塾員は、年齢も経歴もさまざまなのですが、基本的に春挙のスタイルを継承している方もいれば、独自の絵を描かれている方もいて、本当にバラエティー豊かな絵がたくさんあります。

※3 竹内栖鳳（1864～1942）日本画家。京都生まれ。四条派の画風に西洋画法を取り入れ、独自の画風を確立した。



↑取材時、書院床の間に
かかっていた掛け軸

も春挙の戯れ絵です（右写真）。一本の線で竹の節も表現しながら杖を描いて、「老いたると若きを問わでもろともに転ばぬ先のつえぞこの杖」と狂歌をそえています。

どこかの家へ呼ばれてちよつといい気分になってくると、さらさらさつと描いたんです。こうした絵が膳所や京都の旧家にはたくさん残っているようです。

木津 狂歌は師匠の森寛齋に教わったのが始まりのようですが、性に合っていたんでしょうね。しくじったときにも狂歌で返すみたいなことがあったそうです。春挙が亡くなった後に制作された追悼文集『蘆花浅水』にも、春挙の狂歌がたくさん収録されています。

山元 しゃれっ気とちやめっ気が合わさったような人だったんですね。

——人物イメージが180度変わりました。

早苗会の塾員のうち、柴田晩葉^{しばた ばんよう} 小林翠溪^{すいけい} 足田春湖^{あした しゅんこ}などは、地元滋賀県出身です。柴田晩葉は、平成23年（2011）に大津市歴史博物館で「柴田晩葉―湖都のモダン日本画家―」と題して展覧会を催したこともあります。非常に現代的で、最近描かれたイラスト作品といっても通用しそうな絵を描かれました。

そのように塾員の個性はさまざまなのですが、グループの結束力は非常に高かったようです。普通、画塾に集っても、売れた者は離れて一派を築くみたいな感じで集散していくものなのですが、早苗会は年一回の展覧会を春挙が亡くなった年（昭和8年）の第34回（同攻会の時代から数えて）まで続けています（会は昭和18年まで存続）。

また、会の中には明治42年（1909）に講演部、大正6年（1917）に山岳部が設けられました。

令和元年（2019）に愛知県長久手市にある名都美術館で開催された「山元春挙」展でくわしく紹介されたことなのですが、春挙はとても早くから写真術を学び、富士山などへ写生旅行にも出かけています。

山岳の絵を描くには、実際の山岳の姿を知っていなければいけない。ですから、みんなで山に登ったり、風景写真を撮影するのは、絵のスキルアップのための活動でもあったわけです。当時のカメラという写真用機材は結構大きいですから、みんなで協力して山の上まで担いで上がったのでしょう。

——欧米の最新技術も取り入れるハイカラなところがあったということですね。

山元 フィルムは残されていませんが、昭和の初めに当時の16ミリフィルムで撮影した、いわゆる自主映画があって、この部屋で上映したのを見た記憶があります。お弟子さんが侍に扮して、演じているのを撮影したものでした。

木津 春挙は山などでの風景の写生用に横長に継いだ美濃紙^{みののし}をセットする巻き取り式の道具を自作したりしており、非常にアイデアマンでした。その一方で、写生には鉛筆ではなく毛筆を使い続けるなど（9ページ参照）、独自のこだわりもあったようです。

別荘兼アトリエ「蘆花浅水荘」の建設

——春拳がアトリエとして蘆花浅水荘を造営したのは何歳のときになるのですか。

山元 着手したのが大正3年（1914）、43歳のとき。7年かけて、50歳の大正10年（1921）に完成しています。まず1階東側の書院などがある離れを建てて、あとから中庭をはさんで西側の家族の居住部分にあたる本屋を建て、最後に2階部分を建て増したようです（7ページ平面図参照）。

——その時期の膳所周辺はどのような地だったのですか。

木津 大津市（明治31年に市制施行）、膳所町、石山町に分かれていた時代です（2ページ地図参照）。膳所はもともと東海道も通る城下町だったわけですが、明治維新以降、鉄道が通るようになって徒歩による行き来がなくなり、膳所城も廃城となる中次の産業をどうしていくかが、ずっと課題であり続けました。

主たる柱がないまま明治が過ぎてしまうのですが、大正2年（1913）に大津電車軌道（現在の京阪電鉄石山坂本線）の膳所駅—大津駅間が開業します。

そして、大正末にレヨンメーカー2社の工場ができます。大正8年（1919）に粟津にできた旭人造絹糸（のち旭絹織現、旭化成）、大正15年（1926）にできた東洋レヨン（現、東レ）です。東レは石山というイメージがありますが、膳所町にまたがっていました。昭和初期にはそれぞれ従業員が2800人、3600人という規模の大工場で、膳所町は財政的にも潤うようになります。

——新興の企業城下町となるわけですね。

木津 産業と交通の骨格が出来上がってきた、膳所町が盛り上がりをもよおしているのが大正

時代であり、春拳の蘆花浅水荘の建設はそうした時期と重なっていました。

山元 ここはもともと琵琶湖岸の湿地帯です。少しずつ埋め立てが進み、春拳が土地を購入した時点では、すでに陸地化されていました。いまは禅寺になっている隣の戒琳庵にある石垣が、おそらく江戸時代までの陸地の端っこだったと考えられます。

——同時期に琵琶湖畔へ、アトリエや別荘を建てた例は他にもあるのですか。

山元 隣には、浜大津で時計商を営んでいた小倉遊亀のお父さんが建てた別荘があったと聞いたことがあります。

春拳の場合は8歳で母親と死に別れているので、母の墓がある裏山から見下ろす琵琶湖の景色が非常に印象に残ったというようなことも語っています。「将来大成した晩には、ここに別荘を建てたい」という夢をずっと持っていたのでしょう。

——山元さんの子ども時代には、この前はどうな状態だったのですか。

山元 琵琶湖との間の膳所城跡公園から御



↑昭和35年（1960）に撮影された蘆花浅水荘庭園と琵琶湖（大津市歴史博物館蔵）

殿浜までに湖岸道路が完成したのが昭和41年（1966）度のことです。それ以前は完全に琵琶湖でしたから、子どものころはふんどし一丁で飛び出して、泳いだり、魚釣りをしたりしていました。入ってきていただいた表門も昔はめつたに通らず、もっぱら裏口で出入りしていました。

松浦 はるかに三上山を望むすばらしい庭だったと思いますよ。非常に贅沢（ぜいたく）です。やはり春拳さんもこの風景が好きだったんでしょうね。

山元 そうでしょうね。琵琶湖全体が自分の庭だと思ったらいだらうという発想だと思っんです。

木津 古い記録を見ると、琵琶湖に面した部分が船着き場になっていて、石積み階段もありました。お客さんが来たときには、そこから船に乗ってもらって、遊覧もなさったのでしょう。

松浦 おそらく月見なんかでも船を出して、酒を飲みながら語り合ったのでしょうね。当時、大津にはこうした文化サロンみたいな場所ほとんどなかったですから、非常に貴重な存在だっただろうと思います。

——建物にもすみずみまで工夫が凝らされている印象です。

山元 普通、別荘を建てるにしても大工の棟梁と間に設計士が入るわけですが、春拳は自分で図面までつくって、橋本嘉三郎という京都の大工と直接やりとりしています。柱の太さや表面に出る模様についてまで注文をつけているんです。

松浦 画家では橋本関雪（かんせう）もそうだったようです。邸宅の建築や作庭にとても力を注いでいます。

※4 橋本関雪（1883〜1945）日本画家。兵庫県生まれ。竹内栖鳳に師事、中国古典文学に材をとった「新南画」を確立。

——そして、別荘建設と同時期に春拳は、膳所焼復興にも関わっています。

松浦 膳所焼復興に取り組んだ岩崎健三は地元の旧家で、焼物にも適した土が採れる山持ちでした。江戸時代の膳所焼を焼く土を採取していた山の大半が、岩崎家の所有だったようで、膳所焼とは非常につながりがありました。その関係で岩崎家には代々の膳所焼が所蔵されていたようです。そのため健三は、途絶えていた膳所焼を何とか復興したいと考えたわけです。

ちょうど春拳が京都からこちらへ移ってきて、歩いて2〜3分の距離ですので岩崎家とも本格的なつきあいが始まったようです。多趣味な春拳はもともと陶器にも関心があり、京焼の陶工らとも交流があったようです。

江戸時代から膳所焼の土は、地元の土と京都などいろいろなところのものも使っていました。どうも器の種類によって焼き分けているようです。茶入（抹茶を入れる茶器）の場合は地元の土、茶碗の場合はあちこちの土を混ぜていたということが書かれ

た記録があります。

当時、「焼き物に手を出すとか家がつぶれる」と言われるぐらい、お金がかかるものでした。健三も、土地や蔵に残された品々の大半を売ったりしましたが、古膳所（江戸時代の膳所焼）は手放さなかったといいます。

タイミングよく春拳と岩崎健三が出会い、大正9年（1920）に復興膳所焼の新窯を築き初め、翌年完成しています。「陽炎園」という窯元としての名前も春拳がつけたといわれています。

——現在の膳所焼美術館の場所に焼物を焼く窯があったのですか。

松浦 そうです。いまでも残っています。昭和40年代ぐらいまでは、そこで窯を焼いていました。

木津 京阪石坂線の線路のすぐ横に登り窯がありました。大正時代には周りに家がなかったそう。

松浦 いまだったら、それこそ苦情が出るでしょうが（笑）。春拳と岩崎健三は気が合ったんでしょね。ちよっと休憩がてら

に歩いてすぐの膳所焼の窯へ行って、酒を飲みながらいろいろな話をし、「この茶碗にちよっと絵を描いてくれないか」という話になったのでしょ。床の間に掛ける絵などの作品も、膳所焼美術館にはあります。

春拳は、壮大な風景画を描かれるというイメージが強いもので、当館に掛けてある絵を、「これは山元春拳さんが描かれた絵ですよ」と説明すると、驚かれる方がほとんどですね。人間山元春拳”を知る上でも非常におもしろい資料だと思います。

——技術的な指導は専門の陶工にお受けになっていたわけですね。

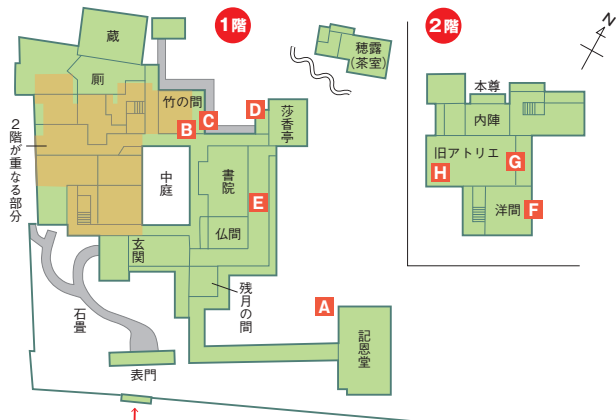
松浦 技術的指導は京焼の伊東陶山（二代）から受けています。

——作品の販売先はあったのですか。

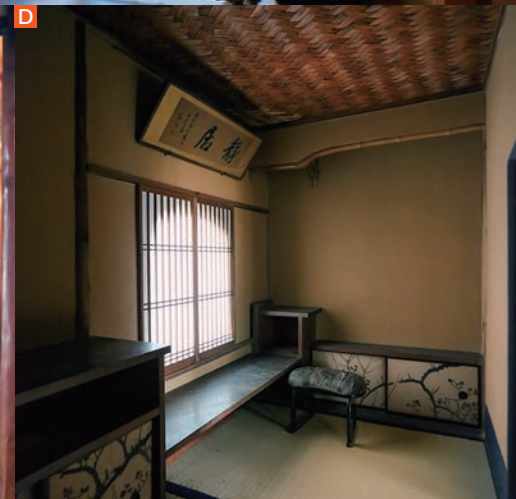
木津 基本的につくっておられるのは茶陶、お茶の道具なんです。もともと膳所焼自体がお茶陶なので。ただ、江戸時代の膳所焼をそのまま再生させたわけではなく、二代伊東陶山の指導のもと、その当時のモード、大正時代の茶道の流行りに合わせたものを作陶していきます。

松浦 ですから、復興膳所焼はわりにバラエティーに富んでいます。もちろん古い江





- A** 書院の東に広がる庭園。右手の建物は渡り廊下でつながった茅葺きの「記念堂（持仏堂）」
- B** 「竹の間」の襖の引手。引手にはどれも工夫が凝らされ、月の満ち欠けを表現して、取り付ける高さに変化をつけたものもある
- C** 「竹の間」の円窓
- D** 6畳の離れ座敷「莎香亭」に接して設けられた1畳半ほどの小部屋は、ヨシの綱代天井。春挙は「無尽蔵」と名づけ、ここで想を練った
- E** 書院の東の量廊下の天井は、中央が高い舟底天井と呼ばれるつくりになっている。5間5尺（約10m）の棟木は京都の北山杉
- F** 2階への階段をあがってすぐにある洋間
- G** アトリエ全景。左手に見えるのは、春挙の出世作「法塵一掃」の下絵
- H** 岩絵具の収納棚は回転式になっている



戸時代の膳所焼をそのまま踏襲した作品もありますが、春拳が関わった絵付けというのも古膳所ではほとんどなく、復興膳所焼になって始められたようです。

木津 春拳経由で、京都であれば三千家(表千家・裏千家・武小路千家の総称)などのお茶の流派の家元、宗匠のような方々とながっていったって、お茶陶としての地位を確立していくことになります。

——その後、半世紀以上が経って、美術館ができるわけですね。

松浦 次の息子さんの代に、家に伝わってきたり新たに健三が収集した古膳所とともに、復興膳所焼の健三の作品などを展示して公開したいと考えられ、敷地内に昭和62年(1987)に開設されました。今年は

地域の文化芸術活動の拠点として

——当時の、大正期の膳所の文化活動としては、他にどのようなものがありますか。

木津 もう一つ、展示で紹介させてもらうのは、清水風外という膳所出身の竹細工作家です。弦楽器やお茶道具、文房調度品などを竹でつくっておられた方ですが、春拳と馬が合ったようで、蘆花浅水荘の中には、あらゆるものを清水風外がつくった「竹の間」という部屋があるぐらいなんです。

大工の家に育って趣味で竹細工に取り組んだ風外はあまり商売つ気がなくて、「ほしい」と言われたら、「芸術品だから売るものではない。ほしかったら持って帰れ」



↑清水風外作の竹製楽器

ちょうど開館35周年にあたります。現在は登り窯でなく電気窯に移行しましたが、作陶も続けておられます。

木津 大津市歴史博物館の展示でも膳所焼を紹介してきましたが、これまでは基本的に古膳所を展示する形でした。

これまで復興膳所焼の作品が紹介される場合は、わりと力チツとしたお茶道具に限られていたのですが、今回の企画展では春拳が狂歌などを書き込んだ作品などにも手を広げようと思っています。

松浦 膳所焼美術館でも、大津市歴史博物館と滋賀県立美術館の展覧会が催される3月から6月に、春拳が関係した絵付け作品や絵、古膳所の茶陶作品などを展示する企画展を催す予定です(10ページ参照)。

みたいな感じの方で、作品にも銘を入れなかったりもして、なかなか作品の全容がわからない部分もあります。

山元 春拳もこれは都合のいい人がおったなと思ったんでしょうね。この間お孫さんにあたる方が来られまして、「よく春拳さんとは酒を飲んだという話を祖父から聞いた」とおっしゃっていました。

木津 そのように春拳は、絵画以外の分野でも地域の芸術活動に関わっていたようです。膳所町が町制30周年を迎えた昭和6年(1931)に発行された『膳所町制施行三十年記念史』という本でも、産業交通と並んで、美術界という章が設けられています。春拳のインタビューが掲載されています。

その中で春拳は、江戸時代に本阿弥光悦がつくった京都鷹ヶ峰や自身がヨーロッパ視察で見聞した地方の芸術村を例にあげて、膳所にいろいろな文化芸術を志す人々が集まってきて、蘆花浅水荘はそうした人々

の集会場として利用されることを望むと語っています。

この場を使った膳所の文化の発展まで春拳自身はイメージしていたわけです。

山元 2年後の昭和8年(1933)に春拳は62歳で亡くなるので、それはまさに遺言みたいなものですね。

木津 たまたまですが、春拳の亡くなった年の4月に膳所町は石山町とともに大津市と合併して姿を消します。

山元 春拳の言葉どおりとまではいきませんけれども、蘆花浅水荘では年3回か4回程度、お茶会や音楽会を催させていただいております。書院のまわりの障子や襖を取り去れば、50〜60人収容できるので。現在はコロナでちょっと見合わせておりますが、やはり尺八や三味線を演奏していただくと合うんですよ。湖岸道路を車が通っていても、ほとんど音には影響されないと皆さんおっしゃって、演奏される方も満足してお帰りになります。

私は大学を出ると同時に県外へ出て、60歳になって戻ってきたもので、そうした利用をするようになってからの日は浅いのですが、ようやく見た目よりはオープンな場所だと認識していただけるようになったと感じています。

今年は特に大津市内にある三つの博物館・美術館で春拳に関わる展示をやっていただけという願ってもない機会も訪れましたので、趣味の発表の場や、着物の展示会のような場としてもどんどん活用していただければと思っています。できるだけご要望のお応えしていくようにしたいと思います。

——本日はお忙しいところ興味深いお話をありがとうございました。

四季大津写生図巻のうち 粟津別保付近・膳所眺望・雪に積む膳所

大津市歴史博物館学芸員

横谷賢一郎

小林翠溪（1902〜55）は膳所の画家。出身は舞鶴ですが尋常高等小学校を卒業した大正7年（1918）、浜大津付近で米屋を営んでいた叔父の紹介で当時の膳所町へ移り

山元春拳に入門、画塾「早苗会」の塾員となりました。当時の春拳は44歳。文部省美術展覧会鑑査員、京都市立絵画専門学校教授、イタリア万博・サンフランシスコ臨時万博鑑査員、

そして翠溪入門の前年には帝室技芸員を拝命し、押しも押されもせぬ京都画壇の重鎮でした。

当然ながら、春拳に入門する者たちは、すでに文展入選の実績をひきつらせた実力者や、京都絵専卒業生など高等教育を修了した画学生など、いずれも腕に覚えのある画家たちでした。翠溪のように特に学画経験もなく16歳で入門するケースは、幕末明治初期の前時代的な徒弟制のような入門で、当時でもかなり異色と言えるでしょう。実際、他の塾員と異なり、彼は、第1期工事が竣工して間もない膳所中庄の春拳別邸「蘆花浅水荘」での住み込みであったようです。

逆にそのことで、常に春拳の動向を間近で見聞できたためか、写生画法の達人であった春拳の技術を、京都市立美術工芸学校や京都絵専出身の門人たちに以上に吸収することになりました。ちなみに、春拳の写生はすべて毛筆によるもので、毛筆をまるでドロ잉のごとく運筆できる点が、春拳や早苗会塾員の特技でした。彼らはこの毛筆ドロ잉をそのまま本画（完成作品）にも応用しており、あえて緑青などの彩色を薄く施したまま、下地のドロ잉線描をみせて、葉繁み、草原、しぶき、などを表現しています。つまり水彩画と同様の効果を、水墨の毛筆で表現しているわけですが、もともと、早苗会塾員がすべてこの写生画法を存分に使いこなせたわけではなく、鉛筆で写生を済ますこともあったことは、古参門人である西井敬岳も語っています。

「先生の鉛筆のスケッチは見た事がない。いつも矢立（江戸時代の筆入れ。ここでは内蔵の毛筆）だった。矢立の写生は却々鳥渡（なみふた）やれぬ。難しい。然しあれでないといかぬ。」

古参門人ですら、降参した毛筆による春拳の写生画法。それを継承した翠溪の成果が、大正10年（1921）に描かれた本作です。観光地以外では写真記録も少ない当時において、かつての美しき膳所の四季の情景やささざるもののない広い景観だった膳所を、翠溪の秀逸な写生画が我々に教えてくれます。



申込締切：3月9日(水)／3月23日(水)

■れきはく講座

「盆梅展「梅仙窟」にみる膳所の近代」
4月9日(土) 14:30～16:00

講師：木津 勝(本館副館長)

参加料：500円 定員：80人

申込締切：3月30日(出)

「陽炎園・復興膳所焼とその時代—古典復興と近代デザイン運動のなかで」
4月14日(木) 14:30～16:00

講師：鈎 真一氏(滋賀県立陶芸の森陶芸館学芸員)

参加料：500円 定員：80人

申込締切：4月3日(日)

■スライドトーク

「蘆花浅水荘と山元春挙画塾」
3月26日(土) 16:00～17:00
4月2日(土) 16:00～17:00
4月13日(水) 14:00～15:00

講師：横谷賢一郎(本館学芸員)

参加料：無料(展示観覧は観覧料が必要です)

定員：各回80人

申込締切：3月16日(水)／3月23日(水)／4月3日(日)

以上のお申し込み方法：当館ホームページ上のweb申込(れきはく講座申込みフォーム)、またはハガキでお申込みください。ハガキの場合は、普通ハガキに講座名と日付、参加希望者全員の郵便番号・住所・氏名・電話番号を記入して、締切日必着でお送りください。
送付先：〒520-0037 大津市御陵町2-2

お問い合わせ先：TEL 077 (521) 2100

山元春挙生誕150年記念企画展 復興膳所焼と山元春挙

前期 3月16日(水)～4月17日(日)

後期 4月23日(土)～6月19日(日)

膳所焼美術館



岩崎健三作・山元春挙筆
「稻穂絵四方水指」
(膳所焼美術館蔵)

入場料：一般600円、高大生450円、中学生以下無料
休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)

■ギャラリートーク

3月20日(日)・4月24日(日)・5月22日(日)
各日 13:30～

■地元企業協賛企画

信楽高原 山田牧場

POP UP SHOP オープン!

開催日：会期中の土曜日、日曜日、祝日

取扱商品：牛乳・ヨーグルト・チーズケーキ・
チーズ・カレーなど

お問い合わせ先：TEL 0748 (83) 0909

山元春挙生誕150年記念企画展 蘆花浅水荘と山元春挙画塾

3月12日(土)～4月17日(日)
大津市歴史博物館



植中直斎「大娘の正月」
(白澤庵蔵)

膳所に生まれ、近代京都画壇で名声を獲得した山元春挙の画塾「早苗会」には、本格派から実験的前衛派まで多士済々の画家が集いました。

本展では、「早苗会」の画家たちの作品を展示するとともに、琵琶湖畔に春挙が構えた別邸兼画室の蘆花浅水荘を中心に展開された当地の文人・職人たちとの交流も紹介。膳所焼の復興に代表される近代膳所の文化的側面にもスポットを当てます。

入館料：一般600円、高大生300円、小中生200円
休館日：月曜日(3月21日を除く)、3月22日(火)

夜間開館のお知らせ：3月26日(土)・27日(日)、4月2日(土)・3日(日)は、20:00まで開館します(入場は19:30まで)。

■現地見学会

「蘆花浅水荘と膳所焼美術館探訪」

3月23日(水)／4月6日(水)

午前の部10:00～、午後の部13:30～

講師：現地講師・本館学芸員

参加料：500円(別途観覧料として1300円必要)

定員：各回20人

第65回企画展 滋賀県立琵琶湖文化館地域連携企画展 伝教大師最澄と天台宗のあゆみ

開催中～4月3日(日)

滋賀県立安土城考古博物館

今年は、日本天台宗の宗祖伝教大師最澄が示寂して1200年の節目を迎えます。

滋賀県立琵琶湖文化館は60年にわたる博物館活動の中で最澄や天台宗に関わる多くの文化財の寄託を受け、収蔵してきました。本展では、琵琶湖文化館が収蔵する最澄に関わりある品々や天台宗の幅広い信仰を示す文化財を中心に公開します。

入館料：大人600円、高大生360円、小中生無料
会期中の休館日：月曜日(ただし、3月21日(祝)は開館、22日(火)は休館)

■ギャラリートーク

3月13日(日) 13:30～14:30

参加費：無料 ※観覧料が必要となります。

お問い合わせ先：TEL 0748 (46) 2424

信楽窯業技術試験場移転記念展

ジャパン・スタイル —信楽・クラフトデザインのあゆみ—

3月5日(土)～6月9日(木)

滋賀県立陶芸の森 陶芸館

陶産地・信楽が火鉢低迷の苦境にあった1950年代後半、クラフトデザイン運動の指導者として各地で活躍した日根野作三らによる信楽窯業技術試験場を拠点とした指導を通して、信楽のモノづくりは新たな活路を見出してゆきます。

本展では、活気に満ちた当時を振り返りつつ、いま信楽で話題の作家たちを紹介。新時代を予感させる(うつわ)を提案します。



滋賀県立信楽窯業試験場
(デザイン)日根野作三
「灯籠」1955-59年

重文 地藏菩薩立像(東南寺蔵)



けいしゅう 閨秀書画家辞典

内藤圭三 編

A4判並製本 総136頁 頒価2300円

問合先 京都府亀岡市西つづじ丘美山台 1-3-132 (著者)

閨秀は学問や芸術にひいでた女性の意。女性の書画家が思いのほか多いと感じた古物商の著者が編んだ落款の漢字から引ける人名辞典。所蔵の作品はカラー写真も掲載。(2021.10.15刊)

滋賀県栗東市岡の歴史 田楽の里の歴史

山本喜三雄 著

B5判並製本 総372頁 頒価3000円

問合先 ヤマキ酒店 (栗東市岡349)

現在の小槻神社御旅所付近に、古墳時代の集落ができ、奈良時代には栗太郎の中心地として栄えた栗東市岡。江戸時代には東海道沿いに田楽茶屋が置かれ賑わいをみせた。(2021.12.1刊)



乗り鉄ときどき城巡り 巻之貳・巻之参 関東甲信越編 (前)・(後)

佐渡 滋 著

A4判並製本 各総128頁 非売品

問合先 大阪府吹田市五月が丘東6-B503 (著者)

城好きの著者が、鉄道に揺られて各地の城跡を巡った写真紀行。巻之貳は神奈川・山梨・長野・新潟の14篇、巻之参は栃木、群馬、茨城、埼玉、千葉、東京の16篇。(2021.11.10・2022.1.31刊)



音頭で奉賛の一四〇〇年 東近江の聖徳太子

丁野永正 著

B6判並製本 総186頁 頒価1000円

問合先 東近江市建部瓦屋寺町 134-25 (著者)

飛鳥時代に推古天皇のもとで国政を担った聖徳太子 (厩戸皇子) に関わる伝承が数多く残る東近江市。太子の業績と市内寺社のゆかりの伝説などをまとめた一冊。(2022.1.30刊)



木下美術館 絵画教室 生徒募集

木下美術館では、「好きな絵を楽しく描く!」をモットーに、絵画教室を開催しています。教室では、



皆で和気あいあいとしみながら、水彩画・油絵・アクリル・日本画・色鉛筆・貼り絵など、好みの画材を用いて自由に制作しています。初心者の方でも安心して参加していただけます。

開催日時: 週1回 (月4回) 13:00~16:00

①水曜コース・②日曜コース

※いずれかを選択してください。

授業内容: 4月~5月 木炭デッサン

6月~11月 制作

(11月頃に作品展示・講習会を行います。)

講師: 小林隆二 月謝: 2,000円

申込み・問合先: 公益財団法人木下美術館

〒520-0016 大津市比叡平2丁目28-21

TEL 077 (575) 1148 休館日: 火・水曜日

開館期間: 毎年4月1日から11月30日まで

Web <https://www.kinoshita-museum.com/>

(2008年に大津市比叡平に移転)。

蒐集品には京都画壇で活躍した竹内栖鳳 (せいほう) や山元春挙、西山翠嶂 (さいしやう)、堂本印象のほか、日本画の巨匠・横山大観などの作品があります。本展では、近年、風変わりな経歴とともに、幻想と写実の融合を描く、謎多き日本画家として再評価が高まる不染鉄 (ふせんてつ) の「山海図絵」など、「木下コレクション」が誇る名画の数々を紹介します。



不染鉄「山海図絵」1925年

入館料: 一般300円、小中生150円

休館日: 月・火曜 (祝日は開館)、5月6日 (金)

お問い合わせ先: TEL 0749 (37) 4500

膳所焼の復興に日本画家山元春挙の多大な協力があったことはあまり知られていません。膳所焼の復興を目指す岩崎健三は山元春挙や京焼の陶工の2代伊東陶山の協力を得て、大正10年 (1921)、当地に登り窯を完成させました。

本展では山元春挙が絵付けした岩崎健三の作品を中心に、山元春挙が描いた絵画、古膳所の茶陶作品などを一堂に展示します。入館料: 一般900円、高大生500円 (いずれも抹茶付き)、中学生以下無料 (抹茶希望の場合は400円)

休館日: 月・火曜日、4月20日 (水) ~ 22日 (金)

お問い合わせ先: TEL 077 (523) 1118

春季特別展 木下美術館所蔵絵画展 —名画との出会い—

I期 4月13日 (水) ~ 5月5日 (木・祝)

II期 5月7日 (土) ~ 5月29日 (日)

愛荘町立歴史文化博物館

木下美術館は、実業家・木下彌三郎が蒐集した近代日本画を中心とするコレクションを公開する滋賀県初の私立美術館として、1977年、大津市茶が崎地先に開館しました



12歳から学ぶ滋賀県の歴史 新版

滋賀県中学校教育研究会社会科部会 編
B5判並製本 総220頁 1650円(税込)

滋賀県の中学校社会科の先生がつくった、どこからでも読める社会科副読本。前回の改訂版から10年ぶりに、荘園や甲賀忍者の解説、近江の時代別城マップなど20ページの増補と改訂をほどこした待望の新版が登場。

地図から消えた村 琵琶湖源流七集落の記憶と記録

写真と文／吉田一郎
B5判上製本 総216頁 3850円(税込)

昭和44年から平成8年にかけて、長浜市北部の高時川源流にあった7集落が離村した。豪雪、炭焼き、野神祭り、クマ撃ちなど、離村直前の暮らしと民俗を記録した写真集。



やさしいネイチャーウォッチング 自然を守り育てる仲間づくり

村上宣雄 著
A5判並製本 総216頁 2640円(税込)

地域情報誌『み～な』連載を再編集のうえ書籍化。学校・地域での自然観察会や生きものを守る活動、ピオトープづくりなどに適応してきた著者の足跡が詰まった一冊。



新 家畜生産学入門

平山琢二・須田義人 編著
A5判並製本 総100頁 1320円(税込)

ウシ、ブタ、ヒツジ、ニワトリといった家畜生産学を学ぶための知識に加え、公務員試験などで頻出される項目についても必要最小限の事柄を掲載。畜産を専攻する学生のみならず、幅広く活用できる入門書。



表紙写真 蘆花浅水荘2階アトリエ

編集後記 別荘の名にある「蘆花浅水」は、唐の詩人・司空曙の「江村即事」という漢詩の一節から取られたものだとのこと。

一方で、明治37年(1904)、当時33歳の春挙は農商務省と京都府に命じられ図案調査と視察に渡米します。この時、持参のカメラでロッキー山脈や滝などの壮大な風景を撮影してきており、彼の作品には実見したアメリカの山々やアメリカ人画家の風景画も影響している可能性が高いのだそう。㊦



おうみ 淡海文庫69 伊吹山風土記

高橋順之 著
B6判並製本 総224頁 1650円(税込)

伊吹山の麓で生まれ育った著者が、日本神話に現れる伊吹の神、修験道の行場と山寺、山肌の石灰岩や花崗岩の利用、スキー・登山など、10のテーマで伊吹山の歴史と魅力を紹介。

琵琶湖博物館ブックレット15 びわ湖の森のイモムシ、ケムシたち

寺本憲之 著
A5判並製本 総128頁 1980円(税込)

400点以上のカラー写真を用いて、山間部や河辺林、畑や田んぼにいるガ・チョウ類の幼虫の奇妙な外観や色彩、不思議な生態を解説するとともに、飼育・標本作成の方法も伝授。



近江学 第13号

成安造形大学附属近江学研究所 編
AB判並製本 総96頁 1980円(税込)

特集テーマは「祭 よりどころ」。絢爛豪華な山車が街中にくり出す滋賀県内各地の曳山祭、中世芸能の「風流」を伝える雨乞い返礼踊りや六斎念仏など、長引くコロナ禍でその継承が危惧される「祭」の過去と現在をめぐる論考を収録。

自費出版年鑑2021

NPO法人日本自費出版ネットワーク 企画
サンライズ出版 編
B5判並製本 総128頁 2200円(税込)

日本で唯一の自費出版に関する年鑑。第24回日本自費出版文化賞の受賞作15点の内容や受賞者のことば、選考理由などを紹介する。全応募作の書誌情報を掲載。第25回募集要項を付す。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet 編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先